

2023 年度 国際学科

小 論 文

〔自己推薦 A O (A)〕 14-02

注 意

1. 監督者の合図があるまで問題冊子は開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙のきめられた箇所に記入してください。

問題

次の文章を読んで、下の問いに答えなさい。

「開発」という言葉にはうさんくささがつきまっています。

この語はもともと「かいほつ」と読む仏教用語で、悟りを開く能力を内側から開花させるという自動詞的な意味が本来です。しかし日本では、明治期に西洋に追いつくための近代化の中で、上からおこなう事業にこの言葉を使ってきました。日中戦争中の侵略の言い換えとしての「満蒙開発」とか、七〇年代に環境破壊の象徴ともされたスーパー林道建設の「森林開発公団」、長良川河口堰建設の「水資源開発公団」など、人権や環境を押しつぶすものにこの言葉がついていたのですから、うさんくささを感じるのも当然です。

このうさんくささは、英語でも似たところがあります。英語の Development ～ de（外へ）envelop（包む）、中のものを解き放つ～という言葉は、第二次世界大戦後の東西冷戦の中で、アメリカ大統領を先頭にして貧しい国々が共産圏に取り込まれるのを防いでアメリカになびかせるために使われてきました。だからそれに反対する人々も当然います。「開発には何らの中身はないが、一つの機能だけは持っている。あらゆる介入を高い目標の名によって正当化する機能だ」という一文は、このうさんくささが語感の問題ではなくて思想に関係していることを示しています。^(ア)

では、開発はしない方がよいのでしょうか。

三十年以上前、初めてフィリピンを訪れたとき、棚田が天まで届くイフガオの村で子どもたちの笑顔に接して、このままが美しい、開発なんて必要ないのではと私は思いました。私が事務局長をしている NGO「草の根援助運動」のスタディーツアー参加者も、しばしばそうした感想を口にします。開発に対する疑問を持つ。これを私は「発展途上国と出会う五段階」の第二段階と定義しています。

もちろんこれだけでは終われません。保健衛生の状態は悪いし、教育は不十分で子どもたちの将来も不安だ。環境問題も起きている。問題は山積みで、このままでよいとはやっぱり言えない。なんらかの開発は必要だ。そこに気づくのが第三段階です。ちなみに、第一段階は、かわいそうな人たちを助けてあげたい、自分になにかできるだろう、という良心の段階と定義しています。

第四段階は、その「開発」が誰のためになるのか、他の開発とぶつからないか、地域の開発がより大きな範囲に与える影響はどうか、全体からその開発を考える段階です。開発問題にはさまざまな立場やステージが絡み合う、それに気づいて少し高い位置から考えるようになります。たとえば地域にリゾート施設ができて雇用が生まれる、そのことが地域にとってどんな意味があるのかを考えます。

そして最後の第五段階は、そんな途上国の村の問題と自分の身の回りの問題の結びつきに気づく問題共有の段階です。たとえば住民同士の助け合いや労働時間と余暇時間の関係など、実は問題の根は同じだ、と気づくこと。つまり、開発問題は途上国の問題ではなく、人間の生き方の問題にそのまま結びつく、ということに気づく段階です。これは実は二〇〇〇年に立てられた国際的な開発目標 MDGs から、現在の SDGs に至る道筋で世界の人々が気づいてきた問題でもあります。開発問題は「途上国」も「先進国」も同じように関わっている。その理解です。

【問 1】 下線（ア）の箇所について、どのように理解したかを記しなさい。

【問 2】 問題文の著者は、「開発はしない方がよいのでしょうか」という問いに対して、「なんらかの開発は必要だ」と述べている。著者の論を踏まえると、どのような「開発」は望ましくなく、また、どのような「開発」であれば望ましいのだろうか。以下に記す参考文献も参照しながら、考えるところを記しなさい。

<参考文献>

アメリカ化としての「開発」が全面的に信じられていた六〇年代、全体が豊かになれば貧しい人々の生活も良くなる、という「トリクルダウン仮説」が開発経済学の中でもてはやされていました。いったんは悪くなってものちに良くなるのだという理論（クズネッツの「逆U字曲線理論」）が、それを補完するものとして引用されました。それが単なる仮説に過ぎなかったことは現在の開発経済学では常識で、二〇一四年に世界的ベストセラーとなったピケティの『二十一世紀の資本』はそれをさまざまな資料により指摘して話題になりました。どんな指標を見ても、貧富の差はますます開いています。[中略]

一方で、開発は貧困層を減らすことにこそある、というのが、国連開発計画（UNDP）の提唱する『人間開発』です。ここでいう貧困削減とは、お金の問題だけではなく、教育

や健康状態などを改善して人々の生きる選択の幅を広げることです。基本的にこうした方向をめざしていると言えるのが、SDGsにつながる「持続可能な開発」で、その共通の目標として「誰一人取り残さない」とわざわざ言っているのはこれを指しています。ただし、この持続可能な開発という言葉は使われ方の幅が広く、トリクルダウン理論が見え隠れしている場合もあるので注意が必要です。

[出典] 問題文・参考文とも、かながわ開発教育センター企画『SDGs時代の学びづくり』（明石書店、2021年）。ただし、一部改変し、本文中の注は除いてある。